

〈研究ノート〉

## 異文化の側面…ブルガリアの日本文化観

——その理解と日本文芸作品の翻訳をめぐる——

ボイカ・ツイゴヴァ

はじめに

文学は、その国民の教養の一部であるだけでなく、国の文化を表現するあらゆる手法であり、それぞれの民族・集団の文化が必ず持つ、表情や様相の表れの一つでもある。これは日本文学においても同様に、文学がそれらを創造する日本人、また日本の精神的伝統である民族文化から離れて存在しているのではないということの意味する。

更に、日本の文学は日本国民の文化遺産の一つであるばかりではなく、それは異なった見方、様々な心境や相異なる考え方などの独特な表れでもある。私達とは異なっていたり、また類似していたりする世界観と心境を知ることが、現代人ひとりひとりの文化的見解の広がり貢献する。また、日本文学へのより深い理解は、私達人

類に共通する、文化の多様性という独自性に気付くことでもある。

各国の母語によって翻訳された文学や表現は、単なる情報源であるだけでなく、「他者」との壁を乗り越える自然な誘因でもある。

これは日本文学の翻訳についても同じ。それは様々な感性の中に存在する、異なった固定観念との出会いを導く。従って、日本の作家による作品の翻訳はそれぞれ、この遠い東の国の、包括的な文化的伝統を知る一方法だと言えるだろう。またそれとは別に、二つの異なった感性、日本語からブルガリア語への翻訳は、相互理解の過程において重要な役割を果たすものだとも言えよう。翻訳という過程を通して、ブルガリアでの日本の作家に対する大きな関心は、単なる好奇心から、よりいっそう個別化したものへと移行していくようになる。

## 一 ブルガリアの日本文化受容の道を進る

日本文学がブルガリアへ伝わるまでの道は、同時にブルガリアが東の大変遠い国を想像するための道ともなった。日本についての最初の情報は、宣教師などによってもたらされたものではなく、見知らぬ遠い国になんとか到達したあるブルガリア人自身の発見によるものであった。

### 日本についてのブルガリアの本をめぐる

日本紹介は、ブルガリアで他のヨーロッパ諸国と同様に旅行記から始まったのである。たぶん次に話す人物より前に日本のことをブルガリアに紹介した人はいなかったと思う。

#### ① 最初の旅行記

一九〇六年に出版された『日本へ渡って』(ПЪРТОМЪ ПЕЗЪ СЛОБИИ, 一九〇六)<sup>1</sup>という本には、ブルガリアの貿易商人アントン・ボズコフ (Anton Bozukov) 自身が、日本や日本国民から受けた印象が書き記されている。その印象はブルガリアで実際にはまだ知られていない世界に対して、深く、また冷静に考察された上で表現されている。彼は日本を見、彼にとっての他者の世界、あるいは異文化について、かなりの確信を持って説明することに成功している。その貿易商人は、全く異なる習慣や風習の中にブルガリアの日常生活との

類似点を探し、発見することに成功した。「五〇ストティンキで昼食が買え、一〇ストティンキでお茶と美しいティーセットを買うことができる。私は何度も驚いたが、このような美しいティーセットが我々の国で五〇、六〇ストティンキもしたら貿易商人は一体どうなることだろう。」<sup>2</sup>

また著者はこう続けている。「日本とブルガリアの鉄道を比べてみた場合、特にブルガリアのほうが劣っている。別に私は母国を批判するつもりは全くないし、また誰かを責めるつもりもない。私はただ、他国の良い面を我々の国に導入したいと願っているだけなのだ……日本人はまるで娯楽に熱中しているかのように真剣に働く」。続けてボズコフはこう明言している。「実際、彼らはとても真面目で几帳面な商人である。しかし、いったん本場の娯楽の場に入ると、持ち金全てを使い切るといふ一面もある」<sup>3</sup>。

この興味深い旅行記には日本文学に關しての記述はないが、それでも初めて日本国民の文化と伝統を様々な角度から書き記す試みに成功している。彼の本から、私達は日本の音楽についても学ぶことができる。「厳格に一定のテンポを保っていたかと思うと、突然低音から高音へと跳ね上がり、人々ははっとする……音楽の全てが大変厳格で、まるで人々に秩序を与えようとするかのようである。ブルガリアの、愛や涙、畏れなどのような劇的で細やかな感情を表現する際の柔らかな音は、日本では見られない」<sup>4</sup>。ブルガリア人の感

性で書いた芸者のもてなしについての記述で、ボズコフは、おそらく本人は知らなかったと思うが、日本の話し言葉、その音声の情報を初めてブルガリアの読み物に記した。実際に、現代の翻訳でさえ間違いの起こり得る日本語の音声の書き取りを、彼は正確に行ったのである。

文章の一つからその例を挙げてみたいと思う。「ゲイシャとは彼女が付き添い、もてなしをする間、ずっとひざをつけて座っているものだ（ブルガリアでもそうではないだろうか？）。あなたは小さな辞書を頼りにして会話をしようとしますが、二つ目の単語を見つげようとしている間に、最初の単語を忘れてしまうだろう。あなたはこう読む。「hai kon nichi wa (moopu dehi)」……そこで会話は終わってしまふ。……実際、私達が何かを言おうとし、間違うたびにゲイシャ達から笑いが起こる。ブルガリアの野原で乙女達が恥ずかしげにしているのとは違って、ゲイシャ達は大声で笑うのである」。この本が注目に値するのは、それがブルガリアで初めて書かれた日本の旅行記という点だけではなく、著者が大変興味深い独自の視点を持っているからである。ブルガリアでは知られていなかった、異なる日常生活や風習についての多くの事実の描写が、ブルガリアのそれと比較したいという願いから編集された。そこには精神や習慣、経済や社会構造についての比較もあった。全体的に木訥で、名詞の中にも多少の間違いがあり、例えば「ショウグン」と書くところを

彼は「ショウグン」と書き、「偉大な指導者」と説明している。また日本の飲み物「サケ」を「サキ」と表記している、など。外国文化のアイデンティティへの評価に対して、明確な基準が欠けてはいるが、それでもボズコフの書いた本はブルガリアにおける日本文化紹介の立派な始まりだったと言えるだろう。

## ② 日本文学に関する記述と論文

ブルガリアにおける日本文化との遭遇は、このように日本を見たひとりのブルガリア人が、その印象を文章にしたことに始まったが、日本文学に関する記述はそれより前、一九世紀の終わり頃にはすでに存在していた。一八九六年にゼミタル・ステレフ (D. Sterev) が「全世界文学史」というヨハン・シェル (Yohan Sher) の本の翻訳、出版を始めた。しかし初巻『序文―東方―中国と日本』(スヴィストフ 一八九六) は別として、それ以外の書籍がまだ見つかっていなかったため、この試みが成功に辿り着くのは大変困難であると予想された<sup>6)</sup>。

しかし日本の詩歌との初めての直接的な出会いには、一九三七年、一九三八年にニコラ・ジェロフ (Nikola Jerov) によってドイツ語とフランス語から翻訳された小詩集、『Сини часове』「青の時」(一九三七)、『Течни от Смаро』「大和歌」(一九三八)、『Илфнага Веика』「花の枝」(一九三八) である。

同時期に(正確な出版年は記されていない)、キリスト・デリツァ

ン (Hristo Derjan) は、編集された五〇作品からなる日本の短歌集『Tenevnyu』(蝶々)という美しい題名の本を出版している。編集者や翻訳者とは別に、キリスト・デリジアンはこの小詩集の中で、日本の詩歌(短歌と俳句)への意見を独自の視点で書き記している。日本人による絵画や詩歌は、彼らの伝統的な簡潔さや鋭敏さを守り続けている——それは湾曲した大きな円である。人の心から始まり、自然を廻ってまたその人の心に返って来る。そしてどんなにそれが小さな円になっても、ただ一つの点で繋がっている。おそらく、いかに短く表現するかという意識に基づき、最も言葉の少ないこの美しい詩の中に、詩というものの真実の価値があるだろう。デリジアンはそう書いている。

ブルガリアの詩人や文学者は初めて私達に日本の詩歌の古典分野からそのいくつかを紹介し、その名称、タンカ(短歌)、カタウタ(片歌)、セドウカ(旋頭歌)、ナガウタ(長歌)を書き記した。これは同時に日本語以外の言葉でそれらを記述することが不可能であったことを示している。更にキリスト・デリジアンは世界の詩という文化的財産の中に日本の詩歌の占める場所を見つけようという試みさえした。日本の短歌について彼はこう書いている。「どのような形で表現されようと、その詩に真の芸術の普遍性が強調される、ゲーテ Johan Wolfgang von Goethe (1749-1832) やハイネ Heinrich Heine (1797-1856) の詩が日本と出会うずいぶん前から、日本の詩

歌の中には彼らの目指した物を見つけることができる。」

一九四一年になってついに、スヴェトスラフ・シンコフ (Svetoslav Minkov, 1902-1966) は『Sioncka jnrepariya. Haralo-pasarnie-npe-ctavnem』(日本文学の始まり、発展とその代表者達)という、ブルガリア初の日本の詩歌の発達と文学の歴史についての本を出版した。これは第二次世界大戦を背景に生まれたものであった。

全てのこのような出版物は、当時の文化的世界の中でほとんど注目されることはなかったが、これは日本とブルガリアという、私達の二つの文化が未来の対話へと導かれることを示唆するものであった。

### ③ ブルガリア人著者の本

そのころから現在まで、ブルガリア人著者の本はたくさんある。

(表1)

一九七二年に出版された『日本手記』という本は日本の日常生活に関する感想文である。著者ミラン・ミラノフは、観光のため日本を訪れたブルガリアの詩人である(図1)。

『日本——現代問題点——』の著者はブルガリアの作家である。彼の本は、日本内外政治の問題点についての個人的な考えをのべたものである(図2)。

『日本そのものについての話』とは、日本経済と日本人の日常生活に就いての印象である。著者はジャーナリストで、現在ソフィア



表1 ブルガリア人著者の本

著者	タイトル	出版年
1 ミラン・ミラノフ Milan Milanov	日本手記 Yaponski beleznik	1972
2 トドル・ペトコフ Todor Petkov	日本国—現代問題— Yaponiya Savremenni problemi i dilemata	1975
3 マルコ・セモフ Marko Semov	日本そのものについての話 Za Yaponiya kato za Yaponiya	1984
4 ボイカ・ツイゴヴァ Boyka Tsigova	禅の美学と日本の芸術的伝統 Zen estetikata I yaponskata hudozes- tvena tradiciya	1988
5 リマ・ミルスカ Pima Mirska	イケバナという芸術 Izkustvoto ikebana	1988
6 ナチョ・パパゾフ Nacho Papazov	刀から人工頭脳 Yaponiya. Ot samuraiskiya mech do iz- kustveniya intelekt	1989
7 ツベタナ・クリステワ Tsvetana Kristeva	水茎の跡 Po sledite na chetkata	1994

大学の社会学の教授である(図3)。  
一九八八年に出版された『禅の美学と日本の芸術的伝統』という本は、「禅の美学とは何か」とその原理、更にどういう風にあるという学が、日本の伝統的な芸術、例えば能楽、水墨画、茶道、華道、俳句などに表現されているかを分析しているのである。著者は、ソフィア大学の日本文学系主任教授である(図4)。

『イケバナという芸術』はイケバナの規則についての本である。著者は現在ブルガリア文部省に勤めている人である(図5)。

一九八九年には、六〇年代に駐日ブルガリア大使の本『刀から人工頭脳』が出版され、日本の歴史、経済、政治、教育制度、科学や技術について述べている(図6)。

そして、一〇世紀から一四世紀までの日本の「叙情味のある散文」についての『水茎の跡』という本は、一九九四年に出版された。その著者の専門は日本文学である。現在、国際基督教大学の日本文学の教授である(図7)。

#### ブルガリアで出版された日本文学小説の翻訳を紹介

##### ① 他のヨーロッパ諸国の言語からの翻訳

ブルガリアに日本の文学が出現したのは翻訳によっているが、最初は日本語からではなくその他のヨーロッパ諸国の言語、またはロシア語から翻訳されたのであった。一九二〇年に初めて出版された『日本の物語』から十三年経って、やっと二冊目の書物、『日本の伝説』(Sofia, 1933) が現れ、その二〇年後に徳永直の小説『静かなる山々』(Hristo Kynev ロシア語からの訳、Sofia, Narodna Kultura, 1953) が現れた。一九五三年以降、日本の作家による短編小説、中編小説、長編小説の出版作業はブルガリアの翻訳者達にとって、もはやまれな出来事ではなくなった。出版にかかる年月はより短くな

ブルガリア人著者の本

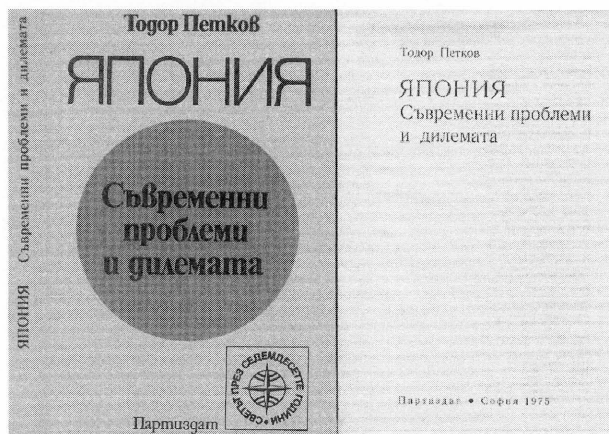


図2 日本国—現代問題点—  
(*Yaponiya Savremenni problemi i dilemata.1975*)

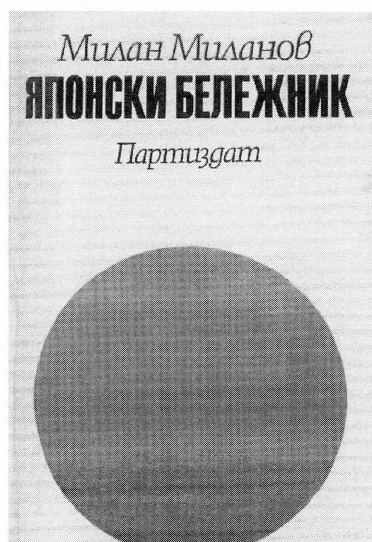


図1 日本手記  
(*Yaponski beleznik.1972*)

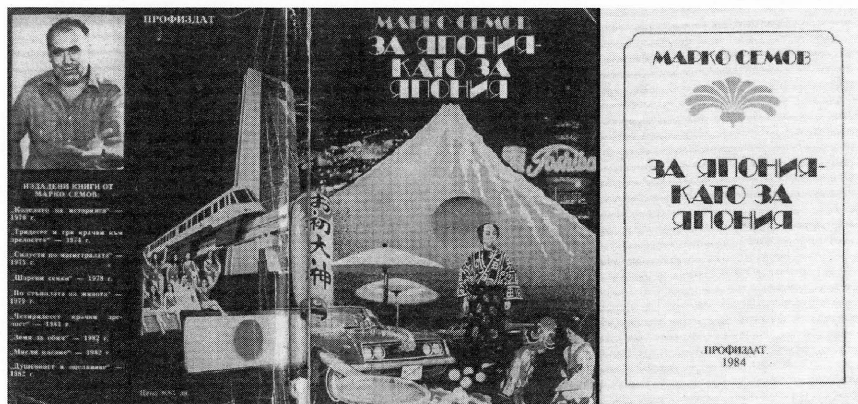


図3 日本そのものについての話 (*Za Yaponiya kato za Yaponiya.1984*)



図4 禪の美学と日本の芸術的伝統 (*Zen estetkata I yaponskata hudozestvena tradiciya.1988*)



图 5 イケバナという芸術 (Izkuството ikebana.1988)

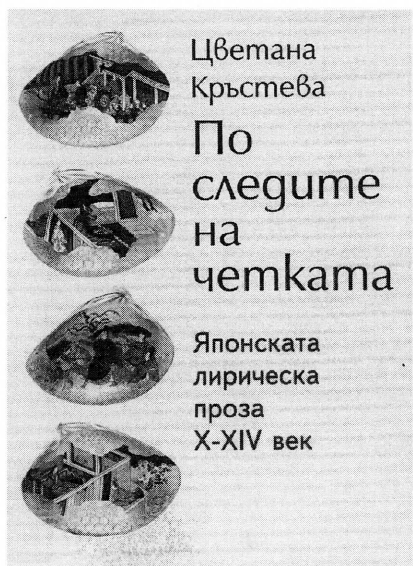


图 7 水茎の跡 (Po sledite na chetkata. 1994)



图 6 刀から人工頭脳 (Yaponiya. Ot samuraiskiya mech do izkus-  
tveniya intellekt.1989)

ったが、出版そのものの頻度は比較的ゆっくりとなり、四年に一冊発行されるのが平均的な目安となった。

そして一九六四年、三人の日本の小説家の作品を編集した『生きろ』（ロシア語からの翻訳）という本が出版された。それに歩調を合わせて松本清張の『点と線』（ロシア語からの翻訳／一九六九）、堀田善衛の『公判』、『СИЛОЧКИ ПАКАЗИ』（日本の短編小説集）（英語からの翻訳、一九七三、Sofia, Narodna Kultura出版）、吉川英治の歴史大河小説『太閤記』（Tahiko）（英語からの翻訳、一九九五、Viewy出版）などが出版された。このように公表されたものとは別に、一九七七年より以前に様々な文学雑誌や新聞、またその他の出版物から短編小説がそれぞれ翻訳されている。中でも一般的なのはSF、『サイエンスフィクション文学』の分野であった。

ブルガリアで一番よく出版された作家は小松左京（一九三二—）、安部公房（一九二四—一九九三）、そして川端康成（二八九九—一九七二）である。また、六〇年代から七〇年代の初めにかけて、深尾須磨子（一八八八—一九七四）の作品がブルガリアに紹介された。けれども、それらの作品のブルガリア語への翻訳は、現代日本文学の美学や個性、伝統的な日本独自の形式を十分に表現できる域には達していなかった。しかしたとえ十分でなかったとしても、それらの翻訳は特別な衝撃を一部のブルガリア文化に与えた。それらに含まれていた芸術的な情報は、日本の文学と詩歌のヨーロッパとは異なる

った様式に対する特別な問題性を提示し、新しい知識を伝えたというだけではなく、私達とは異なる文化環境の中で生まれた伝統とその軌跡からなる文学的な現象、つまり我々から見た「異人」の精神性を正確に理解し、より現実的に考察するための一つのきっかけともなった。

初めて日本語から翻訳された文学作品は、ブルガリアにおいて日本文学が紹介される新しい段階の始まりの合図とも言える。二重翻訳、つまり一度他の言語に翻訳されたものからの翻訳と、日本語の原本からの直接の翻訳とをこのようにそれぞれの時代として区切ることは、意見が合わない人々との間で議論となるかもしれない。しかし逆に言えば、このような区切り方が現在は一つの議論にもなり得ると言えるであろう。

しかしどのような意見があろうと、そのように区切る大きな目的の一つは、実際に、一九七七年までは全ての日本文学が他国の言語、おもにロシア語と英語を通して翻訳されていたという明確な事実があるからである。

## ② 日本語から直接翻訳された小説（表2）

その後、二重翻訳は急速に減少し、今日ではそのような方法は言語上の問題が原因で起こる例外だと見なされるまでになった。また、ちょうど一九七七年から日本文学の本は、ブルガリアの書籍市場で広く取り扱われるようになる。

表2 日本語から直接翻訳された小説

著者	作品	訳者	出版年
1. 川端康成	『雪国』	ボイカ・ツィゴヴァ	1977
		ゲオリギ・ストエフ	1977
2. 芥川龍之介	『羅生門』	シルヴィア・ポポヴァ	1979
3. 林京子	『祭りの場』	ネリ・チャラコヴァ	1980
4. 遠藤周作	『海と毒薬』	ドラ・パロヴァ	1980
5. 後深草院二条	『とはずがたり』	ツベタナ・クリステワ	1981
6. 壺井栄	『二十四の瞳』	トドル・ヂチェフ	1981
7. 井伏鱒二	『黒い雨』	ドラ・パロヴァ	1982
8. 志賀直哉	『暗夜行路』	ネリ・チャラコヴァ	1982
9. 清少納言	『枕草子』	ツベタナ・クリステワ	1985
10. 芥川龍之介	『短編小説からの選集』	ドラ・パロヴァ	1986
11. 有島武郎	『或る女』	ヴェラ・プトヴァ	1988
12. 黒澤明	『蝦蟇の油—自伝 のようなもの—』	ルジツァ・ウグリノヴァ	1989
13. 太宰治	『斜陽』	ツベタナ・クリステワ	1990
14. 大江健三郎	『遅れてきた青年』	ネリ・チャラコヴァ	1993
15. 谷崎潤一郎	『鍵』	ドラ・パロヴァ	1994
16. 世阿弥	『風姿花伝』	ボイカ・ツィゴヴァ	2000

これは偶然ではない。七〇年代中期に入り、以前のソビエト連邦や日本の教育の場で専門的に日本語の教育を受けた最初の世代が、ブルガリアの社会生活に積極的に参加するようになった。彼らにとって、また彼らの次の世代の専門家にとって、日本文学の翻訳を成し遂げるといふことは、第一に行わねばならないことであった。当

然のことながら、ほとんど全員の専門が日本研究——文学や芸術批評、歴史、言語学などであった。日本の主要な作家一人につき少なくとも二つの作品が翻訳され、出版された。また彼らのうちの何人かはそれ以上のことを成し遂げた。彼らは、作家紹介や日本文学史、理論、ブルガリアにおける日本文学の位置付けに関する記事や評論等を書いた。

一九七七年に、日本語から直接翻訳された小説『雪国・千羽鶴』(Pleven, Hristo G. Danov, 1977; B. Tsigova, G. Stoev 訳)が出版された。

川端康成の作品は、通常、生命の瞬間をそれぞれの作品に表現している。活気に満ちた生と、美しい自然界と、美に打ちこむ魂の小説として認められている。彼の作品の全体的な印象は初めから最後まで、全てのものが厳密に意味を持っているように感じられる。それはまるで生命という大きな一つの絵の、断片や要素の一つ一つのようなものである。

「新センシユアリズム(新感覚主義)」と呼ばれていた文学の流派の信奉者達の一人だったにもかかわらず、川端は自分の作品に現代の影響、より正確に言えばヨーロッパ的な影響を受けずにいた。現代とは、過去という源から湧き出す、人生の泉への感謝によってのみ満たされるものだというのが彼の意見であった。作者の心理的な文章は、人類の世界に存在する、平和と美



しきによる、日本の国民性の独自の美徳への賛歌でもある。川端康成の作品のほとんどが多くの言語に翻訳され、世界中で読まれた。それはブルガリアでも同様で、ブルガリアにおける初めての原本からの翻訳『雪国』の他に、いくつかの短編小説が含まれ、一九八二年には小説『山の音』が出版された。

現代日本文学において何よりも特別なテーマは、二〇世紀の原爆による悲劇——広島と長崎である。このテーマは「原爆文学」として大きな文学に成長した。多くの日本作家が、より平和で幸福な人類世界の創造のために努力を惜しまなかった。その中に、ブルガリアでもよく知られている松本清張（一九〇九—一九九二）の独特な中編小説、『神と野獣の日』（Sofia, 1978, Dora Barova 訳）、井伏鱒二（一八九八—一九九三）の『黒く雨』（Sofia, 1982, Dora Barova 訳）、林京子（一九三〇—）編の三つの中編小説からなる『祭りの場』（Sofia, Voeno Izdateilstvo, 1980, Neii Chalakov 訳）がある。全ての作品が暗く、人類の大量殺戮を恐ろしく写實的に描いた物語である。ブルガリアで原爆文学が翻訳されているのは、人間的なものとして扱ったのである。おそらく 広島と長崎の原爆がなかったならば、原爆文学はなかった。つまり、その文学は日本の文学だけではなく、世界文明の一部になったのであると言える。しかも、現在もなお、原爆問題は存在するので、世界中の人々は広島と長崎の日を忘れるべきではないと思う。

志賀直哉（一八八三—一九七二）の小説『暗夜行路』（Sofia, Narodna Kultura, 1982, Neii Chalakova-Panaïtova 訳）は六〇年代からの「私小説」（Ego-belletristic もしくは I novels）として知られる分野に属する、自叙伝としての特性を表している。主人公の表情豊かな会話、複雑な精神の葛藤、エゴ、大きな人類の苦しみの細かな描写などが、社会心理学的な表情を小説に加えている。一方、この作品の登場人物が社会規制にとらわれているという点で、この作品は家族や家庭生活をテーマとした中編小説とも見なされている。この自叙伝風作品の基調として、その構造が組み立てられる際に様々な文体の手法が混ぜ合わされて表現されている。主人公の内心の独自のいくつかがその例として挙げられる。世界における哲学的思考、人間やまたその人生などは、古典的な「随筆」という手法によって表現されている。この小説の一部には、調和のとれた構造とするために最も自然な手法がとられており、作品の新しい構成の中にも、伝統的な手法が自然に使われていることが認められる。この手法により、日本のどの年代の文学においても感じられる伝統的な雰囲気というものが表現され、読者は夢中になった。

小松左京の小説『復活の日』（Varna, T. Bakalov, 1989）と『日本沈没』（Sofia, 1983）は SF 文学の代表作とも言える。また「精神分析」の傾向を持つと言われる心理文学の代表作は夏目漱石（一八六七—一九一六）である。彼にとつての個人主義とは鋭い感受性に

よる表現方法であった。彼の感受性はその作品の中で深遠な感性と劇的な結果を引き起こす。小説『この心』(Narodna Kultura, 1987, Dora Barova訳)は日本の心理小説のすぐれた作品の一つである。

その状況設定はどこにでもあるような、馴染み深い一般的なもの(二人の親友が同じ女性を愛してしまうというもの)であるが、この小説では人格の中の精神という迷路を廻り、自己観察と自己の凝視への没頭が表現されている。著者は自分自身と読者の間に距離を置いている。その孤独と疎外感は、この、自由とエゴに溢れた現代に我々が生まれた代償」とされている。彼の心理的な作品とは別に、漱石はレアリズム写実主義派の創始者としても有名である。この作家は自叙小説の大家としても認められている。一つの分野の領域での実験的試みから、彼は独自の「俳句」また「俳文」の技法を生み出した。残念なことに、この俳句の独自のスタイルを、ブルガリア語に翻訳し、表現する方法はまだない。

二〇世紀の初めの一〇年間、日本文学のおもな傾向は自然主義であった。その外に多くの文学の流派、グループそして傾向が同様に現れ、「理想主義」や「新ロマン主義」や「新人道主義」などの旗のもとに団結した。知識人集団によって初めて形成されたのが「パンの会」で、文学者集団による新しい文学会は「白樺派」として知られるようになった。

この文学会のメンバーの一人に『或る女』(Sofia, Narodna

Kultura, 1988, Vera Vutovaya訳)の作者、有島武郎(一八七八—一九二三)がいる。『或る女』は狂喜と破壊的な自暴自棄との狭間で揺れる、情熱的で悲劇的な恋愛小説である。この作品の主たるメッセージは、女性の個人としての精神的解放である。それは偶然ではなく、男性社会に対する女性達の、平等な社会権利のための闘いの始まりでもあった。世界文学という鏡を通すと、この過程にはイブセン(Henrik Johan Ibsen 1828-1906)の“A Doll's House”のNoraやトルストイ(Lev Tolstoj 1828-1910)の“Anna Karenina”のAnnaのように、特定の登場人物に焦点が当てられている。このグループへ、有島は彼の有名な登場人物、皐月葉子を加えている。『或る女』という題が「一人の女性」という意味を持っていることは偶然ではない。主人公は多くの日本人女性の中の、全くの単なる一人に過ぎない。文学上の登場人物の役割は、日本女性の精神的反乱と、女性解放への試みに対しての社会道徳からの反対や弾圧を表現している。

この小説は二〇世紀の初めに出版された。日本ではこの時期、経済と社会に大きな変化が起こっている。出版当初、この小説は日本の知識人達には高い評価を得ることができなかった。それはおそらく葉子という主人公のイメージと、話の筋が日本文学の伝統的精神に反していたからだと思われる。この小説が“Anna Karenina”に類似していたことも、その理由として考えられるだろう。

よく知られているように、五〇年代の初めには「戦後派」から派

生した「第三の新人」という新しい文学のグループが現れる。その代表者としては、安部公房、三島由紀夫、大江健三郎が挙げられる。その後六〇、七〇年代には遠藤周作がこのグループに含まれるようになる。遠藤周作は「日本のグレナム・グリーン」と言われているが、ブルガリアでは八〇年代に小説『海と毒薬』が翻訳された。これは反戦と写実主義の小説である。「第三の新人」から出たほとんどの作家の作品が、現代社会の「疎外」に深く関わっている。

一九八二年には、安部公房の小説『他人の顔』が出版された。続いて一九八三年に『燃えつきた地図』、一九九三年には『砂の女』が出版された。これらの小説はブルガリアの読者から大変な人気を得た。この三つの小説を通じて、彼は彼独自の世界の中心から現代社会のあらゆる要求に立ち向かっている。また、小説の中の様々な場面を通して、人々の心の内と外、二つの世界の疎外感を表現することに成功している。それは特に『砂の女』において強調されている。

ブルガリアの読者は安部公房にも高い評価を与えた。現実と幻想の世界のあいまいな境界線の表現が、彼の基本的な作風として知られている。

一九八九年、ブルガリアの国立出版社「学問と芸術」が、黒澤明の自伝、『蝦蟇の油——自伝のようなもの——』を出版した。彼は作家として、また映画監督としても高い評価を得、絶大な人気を得

ている。彼の才能の特質は、随筆の断片性、自伝の年代性、私小説の独自のスタイルなど、全ての文学の作風、要素を調和させるといふその創造性にあり、それは彼の作品に強く表れている。彼の作品は現代の新鮮な感覚と、日本の伝統的精神を兼ね備えている。また、作品の中で彼は一人の人間の人生を、映画の「コマ—コマ」に切り取って表現している。重要なことは、人生がどのようなものであるか、ということだけではなく、その人生がそこに存在している、という点にある。

一九九〇年には三島由紀夫の『金閣寺』が出版された。この小説は現代的な心理文学の最も端的な表れである。主人公は彼にとっての美の極致、また理想そのものである金閣寺を燃やそうと試みる。彼は金閣寺を消すことによって、彼のアイデンティティの自滅を図る。そうすることによって彼は彼の心を守ろうとする。この作品では、主体と客体の一体化が表現されている。

一九五六年に書かれた谷崎潤一郎（一八八六—一九六五）の『鍵』は、一九九四年に翻訳された。この作品は愛と破滅の美をテーマとしている。この小説も金閣寺と同様に心理文学に分類される。

一九八四年には『日本の探偵』という、江戸川乱歩、森村誠一の作品が入った本が出版される。このジャンルではもう一冊、池波正太郎の『殺人鬼』という短編小説集が翻訳される。

一九七七年以降、ブルガリアの新聞や文学雑誌には日本語からブ



ルガリア語へ直接翻訳された作品のみが掲載されるようになった。これにより芥川龍之介、谷崎潤一郎、太宰治、井上靖、川端康成、森鷗外、永井荷風等の名が知られるようになった。例えば、一九八五年には『春風景』という一〇人の現代作家の短編小説集が出版された。また、多くの短編小説からの翻訳選集で、日本の著名な作家の一人、芥川龍之介が紹介されている。

周知のように、一九九四年、川端康成の次に大江健三郎（一九三五―）がノーベル文学賞を受賞したが、大江健三郎はブルガリアではすでに七〇年代には有名になっていた。彼の多くの作品がブルガリアの文学雑誌に掲載されていたし、しかも一九九三年ノーベル文学賞を受ける一年前―には『遅れてきた青年』が翻訳されている。

現代文学のみならず、ブルガリアでは古典文学も翻訳されている。一九八一年には二条 (Nijo, Nakanoin Masatada no nusume 一七五七・八一―一三〇八) の『とはすがたり』、一九八五年には清少納言 (九六五―一〇一七?) の『枕草子』、二〇〇〇年には世阿弥 (一三六三―一四四三?) の『風姿花伝』が出版された。

また、俳句においては三冊の選集本が出版されている。一冊は一九八一年の『日本の俳句』、あとの二冊は一九九八年の『俳句』と二〇〇一年の『俳句』である。

しかしながら現在においても、翻訳に関してはまだまだ多くの問題が残されている。日本語とブルガリア語の構造の違いは、日本の

文体、作風を表現する際、大きな困難を生む。ただ単に言葉がわかるといっただけでは文学の翻訳は不可能である。そのため、翻訳者は皆日本について、文学、文学史、文化などについての高等教育を受けたものばかりである。

#### おわりに

私は心から、翻訳という作業は一つの芸術だと思っている。翻訳の質やその良さに対する評価は大変複雑なものだと思っている。一方、翻訳の質は翻訳者の能力に比例している。彼らは日本語や日本文化に対する深い知識を有し、オリジナルの作品に対しても、翻訳されるそれに対してもそれを反映させなければならない。また一方で、翻訳は読者の目からも厳しいチェックを受ける。翻訳はその言葉を忠実に訳すことが重要だという人もいれば、確実に作品を読むことに重点を置く人もいる。また、現代的な響きを求める人もいる。そのうちのどれが必要条件とされるのか、たやすく決めることはできない。つまり、この疑問の答えは、別の研究のテーマになるだろう。

異文化の側面というテーマは、現在準備している新しい著作の一部分になる予定である。おもに、文化における「内」と「外」の意味、「他者」と「異文化」の意味やブルガリアにおける日本文化の理解などが論題である。本稿は、この広いテーマのほんの一部分で

ある。現段階では、まだ完全な内容にはなっていないが、これから積み重ねていこうと思っている。

### 注

- (1) Бозуков А. Пътюмъ презъ Япония, Печатница “Дневникъ”, София, 1906.
- (2) 前注同書 一〇頁。
- (3) 注(2)と同じ。
- (4) 前注同書 一二頁。
- (5) 前注同書 一六頁。
- (6) 実はこの全集は現在もブルガリアの国家文書保管機関には保管されていない。幸い、日本文学の現れと発達について、短い歴史の説明と情報が含まれた最初のこの一冊だけが保存されている。
- (7) 『Пегерудил』. Японска поезия. (Подбор, съставит. Липев.: Христо Derjan). София, с. 62.
- (8) Минков, Св. Японска литература. Начало, развитие, представителни. София, Българска писъм. 1941.
- (9) Миланов, М. Японски бележник (Yaronski beleznik) 『日本手記』 София, Партиздат. 1972.
- (10) Петков Т. Япония. Съвременни проблеми и дилемата. (Yaropliya Savremenni problemi i dilemata) 『日本国—現代問題点—』, София, Партиздат. 1975.

- (11) Семенов М. За Япония като за Япония (За Yaponiya kato za Yaponiya.) 『日本のそのそのその語』 София, Партиздат. 1984.
- (12) Ципова Б. Дзен естетиката и японската художествена традиция (Zen estetikata i yaponskataka hudozestvena tradiciya) 『禅の美字—日本の芸術的伝統』 София, Наука и Изкуство. 1988.
- (13) Мирска Р. Изкуството Икебана. (Izkustvoto ikebana) 『ヤン—ヤン—の芸術』 София, Изд. Български художник. 1988.
- (14) Паназов Н. Япония. От самурайския меч до изкуствения интелект. (Yaponiya. Ot samuraiskiya mech do izkustveniya intelekt) 『尺—かゝ人工頭脳』 София, Изд. Оф. 1989.
- (15) Кръстева Цв. По следите на четката. (Po sledite na shetkataka) 『水筆の跡』 София, 1994.
- (16) 鈴木貞美「グローバルセイション、文化ナショナルリズム、多文化主義と日本近現代文芸」(『日本研究』第二七集 二〇〇三) 一三—五六頁を参照。